

保育内容「言葉」の授業に関する研究

——アクティブ・ラーニングなどを取り入れた実践力を養成する試み——

神谷妃登美 吉見昌弘

1. はじめに

大学教育において、アクティブ・ラーニングという言葉が使われ始めたのは、2012年における中央教育審議会の答申からである⁽¹⁾。この答申において、大学教育の質的転換が求められ、「我が国の目指すべき社会像」において「国民一人一人が主体的な思考力や構想力を育み、想定外の困難に処する判断力の源泉となるよう教養、知識、経験を積むとともに、協調性と創造性を合わせ持つことのできるような大学教育への質的転換」による人材育成が必要であると指摘している。

その質的転換の教育とは「従来のような知識の伝達・注入を中心とした授業から、教員と学生が意思疎通を図りつつ、一緒になって切磋琢磨し、相互に刺激を与えながら知的に成長する場を創り、学生が主体的に問題を発見し解を見いだしていく能動的学修（アクティブ・ラーニング）への転換が必要である」と述べている。アクティブ・ラーニングとは、前述の答申資料によれば「教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的な能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等も有効なアクティブ・ラーニングの方法である」と示されている。このようなグループ学習やディスカッションなどは従来の大学教育においても取り入れられていたが、個々の授業において、教員の経験などに基づき応用、工夫して用いられてきたものが多い。

ただ、少なくとも現在の大学の授業においては、教員が一方向的に教科書を読み、その説明をしながら板書されたものをノートに書き留める方式では、学生の知識を満たすことができても、あくまでも受動的であり、能動的な学びとはならず、それを生かして「想定外の困難」を打破することは難しいと考えられよう。

一方、先の答申を踏まえ2016年には新たな学習指導要領が告示された。それと同時に幼稚園教育要領や保育所保育指針の改訂も行われ、2018年度から実施されるに至っている。2016年中央教育審議会の答申では、学習指導要領の目指す方向性として、「何を学ぶか」だけでなく、「何ができるようになるか」に加えて「どのように学ぶか」を重視し、アクティブ・ラーニングの視点から「主体的・対話的で深い学び」の観点から授業改善することが求められている⁽²⁾。

本研究においては、こうした大学教育の質的転換に伴い、大学の授業における教育方法の改善を計ることに着眼した。本学は、短期大学として幼稚園・保育所における保育者を養成する機関

である。その中でも、保育内容の一つである「言葉」の領域においては、科目名「保育内容指導法「生活と言葉」」の授業を現在、専任教員2名が担当し、それぞれ短期大学2年前期に6クラス編成の中で3クラスに分担して担当している。それぞれの授業は、幼稚園教諭免許状の課程認定や保育士養成施設における「教授内容の概要」等に基づいて、教員のもつ専門分野を生かしながら授業計画（シラバス）を作成し、展開している。

そこで、本研究では、保育内容「言葉」の授業において教育方法の改善を図るために、それぞれの授業展開を振り返り、分析しながらアクティブ・ラーニングなどを取り入れた授業を通して実践力を養成するためには、どのような改善をしていけば良いのか考察していくことを目的とする。

なお、本研究の対象となる授業は、2016年度から2017年度に実施された2年間であり、その中でも特に前述した能動的・実践的な活動の部分に焦点をあてて分析する。

2. 保育内容指導法における領域「言葉」の文献研究

(1) 先行研究の概要

保育内容指導法における領域「言葉」における研究を幅広く分析した研究について、南陽慶子(2017)は、保育内容の領域言葉における研究の全体的な動向を分析した研究を行った。過去の関連する研究を抽出した結果、6つの種類に分類し、特に多い研究は幼稚園教育要領や保育所保育指針に基づく理論研究と保育現場や保育者養成校における授業を分析した実践研究があるとしている。特に養成校における授業実践においては、紙芝居作りや絵本の読み聞かせの実践などを通して学生自身の主体的な学びを促す授業が展開されたとしている⁽³⁾。

また、アクティブ・ラーニングなどの実践的な授業に関する研究も多くみられる。たとえば、原田大樹(2017)は、保育内容（言葉）の授業においてアクティブ・ラーニングを取り入れた授業の実践について考察している。原田は、自らの授業を振り返り、学生から生じた疑問や課題点をフィードバックしながらシラバスの変更を実施したり、紙芝居作成を授業の中で実践し、学生による紙芝居の作成から発表までを実践する中で、言葉の発達や協同性が育つことを考察している⁽⁴⁾。

加えて、鈴木貴史(2016)は、「保育内容（言葉）Ⅰ」の授業において、自分の選んだ絵本を持参し、その絵本の魅力について他者に説明するという書評ゲームを「絵本ビブリオバトル」と呼び、その実践を分析している。その結果、絵本を選択する視点を磨くこと、学生同士による読み聞かせの練習を通じた保育実践を高める効果があると指摘している⁽⁵⁾。

この授業展開では、各グループ内での書評ゲームから代表者を選び、その代表者がクラス全体で発表するなどのグループワークを取り入れて能動的な授業展開を促していることがうかがえる。

言葉と児童文化財の関連について、柴田奈美(1997)は、保育内容「言葉」の授業において、絵本の児童文化財的価値を認識するために、学生自身による赤ちゃん絵本の調査と創作と読み聞かせを行っている。その結果、一連の学習行動によって絵本の児童文化財的価値が実感を伴って

認識されたとしている⁽⁶⁾。

長年の授業実践を詳細にまとめたものとして、平嶋慶子（2017）は、保育内容『言葉』の授業における教材と指導法の研究として、他の授業を含めて22年間の指あそびや絵本、紙芝居他の実演の傾向と変遷を分析している。90分の授業において、前半を実技発表、後半はテキストを用いた理論編としており、実技発表は、授業ごとに3つのグループが各10分間ずつ、導入から、実演、終わりの挨拶を実演し、見学の学生を幼児と見立てて一緒に楽しんだ後、教員からコメントをしている。発表前にはレジュメ資料を提出させ、他の班との重複を避ける一方、事前のリハーサルを教員に見せるなどして事前の練習と準備をさせるなど授業へ向けた主体的な学習も重視している⁽⁷⁾。

少人数のきめ細かい授業展開の実践研究として、本田真大（2017）は、保育内容（言葉）の授業において、幼児への読み聞かせを通して、「幼児理解・総合的に指導する力」や「具体的に保育を構想する力、実践力」などを「実践力の養成」として重視している。対象者が16名と少人数の授業の中、実践力を高めるための教育方法として、15回の授業の後半に幼稚園における読み聞かせの実習を取り入れ、そこに至るまでの授業の中でPDCAサイクルを繰り返すことを試みている。授業の流れとしては、通常の授業の他に授業外学習として予習、復習内容も定める一方、各授業を知識・理解や手遊び、絵本・紙芝居などに区分している。授業での実践においては、絵本等の読み聞かせの練習をした上で、指導計画を作成し、読み聞かせの実践をしたのちに、評価・改善点をワークシートに記入する方式を取り分析している。評価においては、自己評価と話し合いによる他者評価を通して実践をフィードバックすることでより質の高い実践力の養成を目指している⁽⁸⁾。

他の領域との関連から考察したものとして、鳥居美佳子（2017）らは、食育カルタ制作を通して、保育内容複数領域の科目間連携の授業を試み、「言葉」「表現」「健康」などの領域を担当する教員3名が総合的な指導ができる保育者養成教育を模索した結果、領域間の連携の必要性や各領域の視点からも教育効果があると示している⁽⁹⁾。

さらに、幼保小の接続の観点から原田大樹（2016）は、保育内容「言葉」と小学校国語科との接続を考察するなど、保育内容の領域言葉の授業において、小学校の教科国語との連続性を考慮して授業を展開することを示唆している⁽¹⁰⁾。

(2) 先行研究のまとめ

保育内容指導法の領域「言葉」における授業展開における諸研究においては、絵本の読み聞かせの実践や絵本や紙芝居の制作と実演、グループ討論などのアクティブ・ラーニングを実践することで学生が主体となり、能動的で実践的な授業が展開できることが推測された。また、大学教員が学生の状況や何年もかけて授業を改善していくPDCAの流れを確立することでより良い授業改善へとつながる可能性があること、他領域との関連や幼保小の接続の観点からも授業展開を検討する必要があることが示唆された。

以上の先行研究からまとめた視点を踏まえつつ、本学における授業の展開の実践事例を分析、考察していく。

3. 保育内容指導法「生活と言葉」の授業A

以下の実践事例では、本学専任教員2名が分担して担当している「保育内容指導法「生活と言葉」」の授業について、ここでは授業AとBに区分し、その概要と特に実践的な授業展開に着目することで、今後の授業改善への一助とする。なお、担当教員2名の授業では、演習形態を取り、学生はABCDEFの6クラスで各40名ほどで編成されており、それぞれ3クラスずつ担当している。本学における授業Aについて、2017年度前期のシラバスを参考にした授業の概要と展開は下記の通りである。

(1) 保育内容指導法「生活と言葉」の授業Aの概要

①授業概要と方法

乳幼児期は大人とのかかわりの中で言葉を覚え、次第に言葉を使って自分の意志や思いを人に伝えるようになっていく。言葉の獲得は乳幼児期の発達課題の一つとして重要であり、子どもの育ちに大きく影響する。そこで、本授業では、乳幼児が言葉を身に付けていく過程を理解し、言葉の発達を促す援助のあり方を学ぶことを中心に授業を進めた。同時に、ことば遊びや絵本・ペープサートなどの教材が子どもの言葉を育てるためにどのように活用されているか学び、実践力を身に付けられるようにした。

授業の流れとしては、授業の始めに毎回4人の学生が子どもに関した興味のあるニュースを取り上げ、それについて意見発表をした。発表は人前で話すこと、発表者の意見ををしっかり聴くことを目的としたが、学生からの要望で学生同士の意見交換や教員がコメントをすることもあった。その後、前半は教員が用意したレジュメや資料を使い各回のテーマに沿った説明をし、後半はテーマに関連する事例を取り上げたグループワーク、VTR視聴、遊びの実践など、できるだけ体験を通して学びを深められるようにした。また、授業の中で、絵本の読み聞かせ、パネルシアター等の実演、教材の紹介をして、実習や保育者になった時に活かせるようにした。これは、この授業が開講される2年次前期には、開講中に保育実習Ⅰが2週間あり、その後も教育実習、保育実習Ⅱと続くことから、授業と実習を関連させながら進めようとしたためである。

②授業の到達目標

- 1 乳幼児の言葉の発達を理解する。
- 2 言葉を育てる保育者の言葉かけや援助のあり方を理解する。
- 3 乳幼児期の子どもの発達に合った適切な教材を選び、実践できる。

③授業の実際

第1回 オリエンテーション 領域「言葉」とは

この授業で学ぶ内容を授業の回ごとに具体的に説明し、授業の始めに4人ずつ行う意見発表の方法と、課題である絵本ノート作成の意図・方法についても説明した。また、授業外には、常に子どもの言葉に耳を傾けること、絵本等に親しみ、自らの言葉を豊かにする努力が必要なことを

話した。

その後、人にとって言葉とは何か、領域「言葉」のねらいや内容について説明をした。

第2回 乳幼児の言葉の発達① ―乳児期の言葉の発達（誕生～1歳前後）―

授業の始めに指定された4人がレポートをもとに意見発表をした。あらかじめ、話し方、聞き方について注意点を知らせた後、順に発表してもらった。発表時間の感覚をつかむためにタイマーを使って計りながら進めた（以後、11回の授業で、授業の始めに同じように意見発表をした）。

レジュメを使い、クーイング、喃語、初語など誕生後の子どもの言葉の発達と養育者のかかわり方について説明をした後、VTR「すばらしき36か月（ことばの発達）」を視聴した。養育者（母親）のかかわりによって子どもが言葉を獲得していくことを映像で確認できた。その後、今日の授業で学んだことを記録しまとめた（授業では、毎回のその日の授業で自分が学んだことをまとめて提出してもらうようにした）。

第3回 乳幼児の言葉の発達② ―1歳後半～5歳児―

1歳後半からの言葉の発達、幼児語と幼児音の違いについて説明をした後、幼児期の言葉の発達を支えるには何が大切かグループワークをした。「さかながはねて」の手遊びを通して、年齢により理解できる言葉が違うため、子どもに合わせて遊び方を変えることも学んだ。

第4回 子どもの言葉から心をつかむ ―子どものつぶやき（口頭詩）―

子どものつぶやきを記録することで、保育者は一人一人をより理解できるようになる。また、子どもの捉え方、自分の保育の振り返り、保育観の確立にもつながることを説明し、口頭詩集に書かれたつぶやきを使って子どもの気持や発達を読みとるグループワークをした。授業での学びをもとにして、2週間後の保育実習時に子どものつぶやきを記録し、つぶやきから理解したこと・考えたことを指定の用紙にまとめるという課題を出した。

第5回 3歳児の言葉と保育者の援助

3歳児の言葉の特徴と保育者の援助について説明した後、昼食の時間に食が進まないD児の事例を取り上げ、指定された内容についてグループワークをした。うまく言葉で表現できず自己中心的にやり取りをする3歳児の特徴と、保育者が言葉を補いやり取りを重ねることで子どもの言葉が育つことを理解した。

実習で絵本の読み聞かせをすることを想定し、読む前から読み終えた後の一連の流れを教員が実際にやって見せ、絵本の読み聞かせについて学んだ。

第6回 4歳児の言葉と保育者の援助

4歳児の言葉の特徴と保育者の援助について説明した後、事例をもとにグループワークをした。実習直後だったため、事例に出てきた4歳児が、仲間に自分の考えを聞いてもらえた嬉しさや仲間と一緒に考える面白さを感じる姿と、保育者の援助の意図が捉えやすく、実習時に見た子どもの姿や保育者のかかわりについても積極的に意見交換し、理解を深めることができた。

第7回 5歳児の言葉と保育者の援助

相手の意見を聞いて自分の気持ちを抑制したり立て直したりして、仲間で相談しながら遊びを進める5歳児の姿、子どもの思いをつなぐ保育者の援助について説明をした。仲間入りの交渉をする事例を取り上げてグループワークを行い、子ども同士のやり取りの姿から5歳児の仲間関係

と言葉との関係について理解を深めた。また、「なぞなぞ」「しりとり」のことば遊びを実践し、その楽しさや5歳児に適した遊び方について考えた。

第8回 子どもと絵本

レジュメと資料を使い、絵本の選び方、絵本を通して育つもの、読み聞かせ方について説明した。ほとんどの学生が保育実習時に読み聞かせを経験していたため、興味を持って聞いた。絵本を見せながら子どもの発達と絵本選択のポイントを話したため、実習時の経験を振り返りながら興味深そうに聞いていた。

第9回 お話づくり ―紙芝居を使ったお話づくりと発表―

既製の紙芝居を使い、5・6人のグループでお話づくりをした。方法は、紙芝居の1話の中から5画面を選び、絵からイメージを膨らませてストーリーを作るようにした。昨年は4画面でストーリーを作ったが、画面数が少なかったためにイメージは膨らんだものの、ストーリーの展開で無理をしたため、今回は画面数を1枚増やすことにした。できた紙芝居をみんなの前で発表し、最後に点数をつけて作品の出来栄を競った。

第10回 さまざまな児童文化財 ―言葉の発達を促す児童文化財―

パネルシアター、エプロンシアター、ペープサートを取り上げ、それぞれの特徴や演技方について知らせた。全員が1年次の授業課題で作ったり演じたりした経験があり、中には、2年次の保育実習で子どもに見せた学生もいて、授業内容が伝わりやすかった。教員が演じながら話を進めていったが、学生にも体験を話す場や演じる場があると良かった。

第11回 絵本から劇遊びへ① ―劇遊びの取り組み―

劇遊びは、つもり遊び、ごっこ遊び、なりきり遊びから始まること。3歳児になると絵本を繰り返し読んで、好きな言葉を一緒に言ったり動作したりして劇ごっこになることを説明した後、3歳児の劇遊びのVTRを見て、絵本をもとにした劇ごっこの進め方についてグループで話し合った。

第12回 絵本から劇遊びへ② ―4・5歳児の劇遊び―

生活発表会などの劇について、4歳児と5歳児の取り組み方の違い、言葉の領域で経験していることについて説明した。その後、5歳児の劇のVTRを見て、劇の取り組み方や子どもが経験していること、前回見た3歳児との違いについてグループで話し合った。

第13回 言葉を豊かにすることば遊び ―様々なことば遊び―

保育で取り上げることの多いなぞなぞ、さかさことば、早口ことば、ことばあつめ、伝言ゲーム、同音異義語探しなどのことば遊びを実践しながら、発達に合わせたことば遊びができるように、資料を使って遊び方や遊びの楽しさについて説明をした。

伝言ゲームでは、子どもが分かりやすいように絵カードを使うことを提案し、チームの伝える早さと正確さで得点をつけて競った。ことば遊びは、語彙を増やすだけでなく、みんなで楽しみながらイメージや発想力を豊かにし、子どもの考える力を伸ばすことを実感できた。

第14回 文字への興味・関心を育てる ―生活や遊びの中の文字―

実習園で見た文字環境や遊びで文字を使う姿について尋ねながら、園生活では文字をどのように取り上げているか、幼児教育と小学校教育との違いなどを説明した。ひらがなカードを並べて

食べ物や動物などのことば作りを実践した。

第15回 「言葉」の領域のまとめ

これまでの授業を振り返り、子どもの言葉の発達と発達を支援する保育者の役割や方法についてまとめた。言葉づかいチェックリストを使い、自分の言葉の使い方についても振り返った。

(2) 保育内容指導法「生活と言葉」の授業Aの実践的な授業展開

①毎回の授業における意見発表の実践について

保育者は、常に分かりやすい話し方をする、子どものつたない言葉から気持ちを受け止め理解すること、自分の考えをもつことが大切である。そこで、この実践力をつけるために言葉の授業では意見発表を取り入れている。日々のニュースの中から子どもに関する興味のある話題を選び、意見発表用紙に原稿を書いて準備をするようにした。昨年までは原稿をそのまま読む学生がいたので、今回はA4用紙の上半分に記事の内容と意見のポイントのメモを、下半分に自分の意見を書き、発表時は半分に折ってメモを見ながら自分の言葉で話すようにした。発表前に、人前で話し方、発表の聞き方について注意を与えてから始めた。限られた時間の中で毎回4人が発表するために、時間を1人2分程度とした。しっかりした意見が無くすぐに発表を終わったり、意見がまとまらずに話し続ける学生もいたりしたが、次第に2分の感覚をつかみ、時間に合わせて話ができるようになってきた。

発表では、保育の様々な問題や子どもの成長発達に関する事等が取り上げられ、学生の視野を広げる良いきっかけになったが、授業で知らせたいことやグループワークの時間が十分取れないことが課題となった。学生からは、発表したことについてのコメントや意見交換の希望が出たため、途中の回から、時々要望にも応じるようにしたが、意見発表と授業内容のどちらも中途半端になってしまった時もあり、方法の再検討が求められる。

②3、4、5歳児の事例をもとにグループワークを展開する

年齢による言葉の発達の特徴と発達を促す保育者の援助についての理解を深めるために、事例をもとにグループワークをした。同じ事例でも学生によって感じ方や考え方が違い、意見交換をすることで自分にはない考えをもつことができたという声が聞かれた。また、保育実習の前後にこの授業をしたため、事例の中の子どもの姿や保育者の援助と、実習先での体験とが重なって考えやすくなり、より理解が深まったと思われる。

話し合いのポイントを書いた記録用紙を用意し、みんなから出た意見を記録しながら話し合いを進めるようにしたが、教員の考えた話し合いの意図がうまく伝わらず、方向がズレてしまったグループがあり、途中で説明を直したり補足したりしたこともあった。また、一部には、ほとんど聞き役になっている学生もいた。事例をもとにグループワークをする場合は、学生に分かりやすいテーマを出すこと、メンバー全員が意見を言うように声掛けすることなどの配慮が必要であった。

③既製の紙芝居を使ったお話づくりの実践

5・6人でグループになりお話づくりをした。既製の紙芝居から5画面を選び、絵からイメージを膨らませてストーリーを作った。対象年齢や子どもに伝えたいことも考えるように話したところ、画面を並べて自分のイメージを出し合うグループと、考え込んでしまいいつまでたってもストーリーができないグループがあった。子どもが興味を持っていること、楽しいと感じていることを取り入れると話を作りやすいと助言したところ、元のストーリーからは想像もできないような展開になったり、同じ画面を2度使って話をより面白くしたりなど、メンバーがアイデアを出し合いながら取り組んでいた。発表では、役になりきって読んだり、途中に歌や手遊びを入れたり、見ている人とやりとりしながら話を進めたりなど、様々な工夫が見られた。

この授業は、90分の授業の中で作り方の説明を聞き、ストーリーを考え、出来た作品を発表するという慌ただしいものであった。話を作ることの楽しさやグループで協力する楽しさは経験できたが、お話づくりや発表にもう少し時間をかけじっくり取り組み、この経験を保育でどのように活かすかについても考える必要があった。使える紙芝居の数が限られていること、90分授業ではこれ以上発表時間を取れないことからこの方法を進めたが、グループの作り方や時間配分についても見直しが必要と思われる。

④絵本ノートの作成を通して

保育では絵本の読み聞かせが常に行われている。しかし、1年次に自ら読んだ絵本の数を学生に尋ねたところ、10冊以下との答えがほとんどであった。多くの絵本に触れ、絵本の楽しさを感じ理解を深めてほしい、保育で活かせるようになってほしいと考え、授業外の学修として絵本ノート作成を課題とした。第1回の授業時に、B5のノートに絵本30冊を読み記録すること、記録する項目として①絵本の題名②作者名③出版社名、初出の出版年月④登場人物⑤あらすじ⑥絵本を通じて子どもに伝えたいこと⑦絵本の評価⑧何歳児向けの絵本か⑨絵本の感想の9項目と、絵本の雰囲気が分かるように表紙などをイラストで描くこと、それ以外は各自で工夫することを説明した。絵本ノート作成は初めての試みであり、4ヶ月間で30冊という数が学生にとって適当かどうか、期間中に実習や就職活動もあるため計画的に取り組めるかなどの不安もあったが、状況に応じて変更することも視野に入れながら始めた。授業時に困っていることや進捗状況を尋ねたり、計画的に進めるように励ましたりした。

提出された絵本ノートは個人差が大きく、指示された項目と表紙のイラストを並べただけのものあれば、絵本のイメージを活かして1ページを作品のように構成したものもあった。後で見やすいように目次をつけたり、作家の他の作品をメモしたり、評価をリングの数で書き表したりなどノートのあちこちに学生のこだわりや楽しみながら書いた姿が見られた。取り組んだ感想、気付いたことをアンケートに書いてもらったところ、量が多くて大変という声はあったが、実習や現場に出た時に役に立つ、絵本への理解が深まった、絵本とたくさん出会いお気に入りの本を見つけることができた、絵と一緒に描くことで印象に残り良かったなどの声があった。じっくりと読んだからこそ作者の意図や、読み聞かせ方を考えるきっかけができたと思う。

ノートに書いた9項目の中には、重なるものや書き表しにくいものもあり、項目の再検討が必

要かと思われる。また、提出直前になって慌てて書いたように見えるページもあったので、計画的に取り組ませる方法も考慮したい。学生にとって30冊を読み記録するのは負担が大きいと思ったが、30冊読んだからこそ気付いたことが多くあり、それは絵本ノートやアンケートの中に表れていた。このことから、30冊は適切だったと考える。

4. 保育内容指導法「生活と言葉」の授業内容B

前述の授業実践と同様に、本学保育内容指導法「生活と言葉」における授業内容Bの授業実践を分析、考察する。なお、本授業においては、前年度の授業を振り返り、シラバスや授業の進行を修正した上で授業展開をしている。

(1) 保育内容指導法「生活と言葉」の授業Bの概要

①授業概要と方法

本授業の概要は、乳幼児期を通して子どもは周囲の人々と関わりながら自然に言葉を獲得していく。しかし、言葉を獲得していく過程は決して単純でないため、言葉とは何か、言葉の発達には何が大切かを理解してもらった。さらに言葉の発達を促すための教材として絵本などの児童文化財をどう活用すべきか絵本の読み聞かせの実践や絵本制作を通して学ぶこと目指した。

毎回の授業の流れとしては、授業の最初に番号順に3～4人が自分で選んだ絵本の読み聞かせをクラスの学生達を子どもに見立てて教壇で実施してもらうことにした。その際、選ぶ絵本は特に指定しないで自由に自分で選んでもらい、なぜ、この絵本を選んだのか最初に説明してもらった。また読む時間は導入を含めて一人3分以内と定め、長いストーリーの場合は話を短くするように指示をした。

その後、前半は、教員自身が作成した教科書を使って、各回の授業のテーマに沿って説明をした後、後半は関連するVTRを視聴し、提示した課題に沿って感想を書いてもらったり、グループごとに絵本の読み聞かせを実践したりするアクティブな活動を織り交ぜながら授業を展開した。授業毎の課題には、moodleなどのeラーニングを活用することも検討したが、実際には欠席者のために課題を提示するための掲示板としての役目を果たす程度になった。

②授業の到達目標

- 1 幼稚園教育要領、保育所保育指針では言葉をどのように捉えているのか理解できる。
- 2 言葉とは何か、言葉の発達過程について説明することができる。
- 3 言葉の発達を促す保育者の働きかけや児童文化（絵本など）との関わりを理解し、実践できる。

③授業の実際

第1回 オリエンテーション（授業全体の流れ、授業の進め方やルールの説明）

初回の授業で半年の授業全体の流れを説明した。その後、この授業の進め方やルールの説明を

した後、各授業の最初に実施してもらう絵本の読み聞かせの発表順を決めた。絵本の読み聞かせの仕方のお手本として担当教員が初回のみ「だいくとおにろく」の読み聞かせを実演した。

第2回 言葉とは何か

授業の最初に絵本の読み聞かせを4名で3分ずつ実施してもらった。聞き手の学生達は、読み聞かせを聞いた絵本の中からおもしろいと感じた絵本を一つ取り上げ感想を書いてもらった（以下、この部分は省略する）。授業内容は子どもが言葉を概念化する働きについてヘレンケラーが言葉を覚える例などを挙げて理解を深めた。

第3回 言葉の働き

言葉の働きについて、伝達や行動調整の働きなどの視点から教科書を使って説明を行った。後半は、VTR 伝える極意「話して聞いて幸せになろう～話し合い～」を視聴した後、指定した課題に回答してもらった。

第4回 言葉と児童文化財 ―教材の種類（絵本、ペープサート、パネルシアター）―

昨年度は、この回に子どもの言葉の発達について説明し、考えてもらうことを実施した。しかし、保育実習がこの時期に予定されており、その際の学生の要望として「絵本の読み聞かせの練習をもっとしたかった」という意見があったことから、今年度は、順番を入れ替えて、児童文化財を紹介した後、絵本の読み聞かせの練習をしてもらうことにした。その端緒としてVTR「読み聞かせと絵本選び」を視聴した後、指定した課題を回答した。

第5回 言葉を育むための保育者のかかわり ―絵本の読み聞かせの実演―

保育実習が始まる直前の授業であり、最初に教科書に沿って絵本の選び方や読み聞かせの方法などを説明した後、5～7名ほどのグループを作ってもらいグループワークを実施した。グループ内では各自が持参した絵本を使い、お互いに読み聞かせをしてもらった。グループの一人が読んでいる間は他の学生は子どもの役割を演じてもらい、読み聞かせの後是一言ずつ感想を出し合うなどの作業を繰り返した。

第6回 子どもの言葉の発達 ―乳児の言葉の発達―

保育実習終了後の最初の授業で、乳児の言葉の発達について教科書を使って説明した。その際、YouTubeなどの動画を利用し、泣き声や喃語などを視聴してもらうことで実際の様子を理解してもらった。特に保育所での実習直後のために乳児に直接触れ合った経験などを感想に書く者も多く、理論と実践を行き来した授業が良いことが理解された。

第7回 子どもの言葉の発達 ―1～3歳児の言葉の発達―

初語が生まれる頃から3歳までの言葉の発達について教科書を使って説明した。特に幼児語などの言葉の発声はYouTubeなどの動画を利用した後、VTR「ことばを覚える不思議」を視聴した後、指定した課題に回答してもらった。

第8回 子どもの言葉の発達 ―4～5歳児の言葉の発達―

4歳から6歳頃までの言葉の発達について、話し言葉の定着から文字への関心までの道筋について教科書を使って説明した。その後、文字への関心を高める一つの実践体験として、「言葉遊びシリーズ ～カルタで遊ぼう～」を企画し、各グループでカルタ遊びを実践してもらった。2回ほど繰り返す中で、カルタを取った枚数を競うことで楽しめるように工夫をした。

第9回 保育内容の領域「言葉」

—幼稚園教育要領及び保育所保育指針における領域「言葉」—

幼稚園教育要領や保育所保育指針における領域「言葉」の位置づけについて5領域との関連を含めて教科書を使って説明した。特に領域「言葉」は遊びを通した総合的な指導の中でねらいを達成することを説明することで、保育内容における言葉の位置づけを明確にした。

第10回 保育内容の領域「言葉」 —領域「言葉」と教科「国語」との関係—

保育内容の領域「言葉」と小学校以降の教科「国語」との関係について教科書を使って説明した。特に、なぜ幼児期に話し言葉が大切であるかについて触れることで小学校国語との関連についても言及した。後半では、VTR「“小さなことば”をみつめて」を視聴した後、指定した課題を回答してもらった。

第11回 言葉と絵本 —世界で一つだけの手作り絵本—

手作り絵本の制作をする前に、市販されている絵本の構造や特徴について、実物の絵本を見ながら理解を深めてもらった。特に絵本の表紙や裏表紙、タイトルの位置、絵本の絵や文字の配置、絵の道具の使い方など、実際に絵本を制作するために最低限必要な知識を理解してもらった。

第12回 言葉と絵本 —絵コンテ作り—

「世界に一つだけの絵本を作ろう」というテーマで5～7名ほどのグループを作り、グループごとで絵本のテーマと絵コンテと呼ばれる絵本のストーリーの流れの原案を1枚の用紙に作成してもらった。テーマは特に指定することはなかったが、「自分達がおもしろいと感じるようなユニークで独創的な絵本を作って欲しい」という担当教員の願いは伝えた。3～4回の授業で完成と実演を目指すために、授業外での学生負担が過度にならないよう、あらかじめA4サイズに近い手作り絵本の制作キットを用意し、白紙のキャンパスに色鉛筆や絵の具で絵を描くようにした。

第13回 言葉と絵本 —絵本の制作と製本—

絵コンテを使って全体の流れを把握した後、各担当箇所のページはできるだけ一人一人が責任をもって担当することを最初に依頼した。過去にグループで絵本の制作をした際、絵の上手な学生がすべての主人公の絵を描いたりして、負担感の不公平が生じたことと、各担当箇所を明記させることで個々の評価がしやすくなることが理由である。全体の絵本の絵と文字が完成した後、バラバラのページに木工ボンドを使って一つにまとめて絵本を完成させた。

第14回 言葉と絵本 —手作り絵本の実演—

各グループで作成した手作り絵本について、紹介と読み聞かせの練習をしてもらった後に、各グループ10分程度で読み聞かせを実演してもらった。実演の際、制作した全員が必ずお話を担当するように伝えて、実演しない者が一人もいないように配慮して実施した。

第15回 全体のまとめ

授業のまとめとして15回の授業全体の振り返りを行った。特に手作り絵本については、制作と実演を通して学んだことや分かったことを文章にしてまとめてもらった。

(2) 保育内容指導法「生活と言葉」の授業Bの実践的な授業の考察

①毎回の授業における絵本の読み聞かせの実践について

学生数が40名ほどの演習形式の授業で、各授業で読み聞かせをするとすると初回と最後の授業を除くと毎回3～4名ほどの学生が読み聞かせをしてもらうことになった。授業で伝えたいことや実践をしてもらうことを考えるとこの読み聞かせの時間をいかに効率的に進めるかが課題となった。一人3分という制限はかけたものの絵本を途中で止める訳にはいかず、一人5分程度かかることも多かった。今後の課題としては、ストーリーを短縮したり、ページを飛ばして読むことも許されることをきちんと説明すべきであったと思われる。

また、学生による感想では、毎回の授業での絵本の読み聞かせの実践は、「他の学生の読み聞かせを見学することで勉強になった」とか「自分が実践することで人前で絵本を読むことに対して自信をもつことができた」という意見が多くみられた。

読み聞かせの技術については、実習に関連する他の授業での成果もあり、多くの学生が身体の横に絵本を持ち、聞き手に見えるように読み聞かせを実施していた。しかし、絵本の文字を読むことに集中してしまい、聞いている学生（子ども）の方に顔を向けて読み聞かせをする学生が少なかった。今後の課題としては、絵本の読み聞かせのポイントをきちんと提示しながら、ルーブリック評価のような形で自分自身が自己点検できるような仕組みを作ると良いと思われた。

②絵本カルタの実践について

授業の中で日本の昔話と世界の昔話を題材とした市販の絵本カルタを教材に使い、実践した。この実践の目的は（小学校入学を控えた年長クラスを想定して）文字への関心を高めるための遊びを体験してもらうことであった。実際の保育場面でも子ども達が先を争ってカルタ取りに夢中になり、意識することなくカルタに書かれた言葉を覚える光景を何度か目にするがあった。

実践の最初は、各グループに配られた絵本カルタを使って読み手を一人選び、その他の学生が読み上げられたカルタを取ってもらった。その後で各グループで取った枚数に応じて順位を決めると説明して一斉にカルタ取りを開始してもらった。最初は、あまり意欲的でなかった学生も、回を重ねるにつれて夢中になってカルタを取るようになった。また、ルールを自分達で決めるグループも出てきて、手を頭の後ろに組んで読み上げてから手を出すという方法を採用しているグループもあった。

今後の課題としては、自分達で特定の目的に沿った手作りのカルタを作ったり、大人でも楽しめる独自のルールを決めるなど、カルタ遊びの意義と楽しめる工夫を学生自身が考えてもらえるような授業展開を考えると良いと思われた。

③手作り絵本の制作と実演について

全体の授業の後半の中心テーマとして、手作り絵本を各グループで制作した。最初に絵コンテを作ってもらうことで絵本の全体像を把握することを学んでもらった。絵コンテの制作にあたっては、テーマは自由であること。それぞれのコマにラフで良いので鉛筆で絵と文字を入れることを提案した。グループでの話し合いでは、すぐにテーマが決まる班と1時間かけても決まらない

班などの差があった。また、最初は多くのグループが、市販された絵本を模倣したストーリーを作ったり、あらすじが平凡で淡々としたものが多かった。絵本の特徴は想像力を働かせて自由なストーリーと絵の構図を考えること。自分自身がおもしろいと思えるような奇想天外なお話や共感できる身近なお話を考えるように助言をしながら考えてもらった。

絵の色塗りと文字については、グループの多くが色鉛筆で淡い色塗りをしていた。色鉛筆が一番手軽であることが考えられるが、絵の具を使っても良いこと、また絵の具と色鉛筆などの複数の組み合わせでも可能なことを助言した。さらに、読み聞かせを前提にして絵本を作ることから登場人物の輪郭を黒マジックで強調したり、文字を大きく書いたりして少し離れて絵本を見てもはっきりと分かるように助言をした。

制作における今後の課題としては、絵コンテの作業においては、グループ間で時間がかかり過ぎないようにヒントを与えたり、授業外で事前に情報収集することを勧めるなどの指導が必要であること。色塗りと文字の書き方については上手に制作したサンプルを多く見せてイメージ化できるようにする工夫が必要であると感じた。さらに絵本で使われる文字については、カタカナの英語で書かれたり、難しい文字や漢字を使うグループもみられたことから、あくまで子ども向けの絵本を作るような意識的な働きかけが必要と思われた。

5. まとめと今後の課題

本研究においては、保育内容の領域「言葉」の授業における教育方法の改善を図るために授業展開の先行研究と本学担当教員2名の授業実践を分析、考察しながらアクティブ・ラーニングなどを取り入れた実践力を養成するための授業展開を検討した。その結果、以下の重要な点と課題があることが分かった。

①アクティブ・ラーニングの視点を入れたグループ学習や絵本や紙芝居の制作、読み聞かせなどを通した実践的な授業展開を実施すること

「主体的・対話的で深い学び」を通して実践力を養成するためにはアクティブ・ラーニングの手法を取り入れた授業改善が必要不可欠である。本研究でも実践的な授業展開を中心に分析、考察を実施したが、実践的であるためには、常に学生のニーズや状況に応じて柔軟に授業展開を変化させていくことが重要であると考え。たとえば、絵本の制作においては、完成度の高い絵本を作るのではなく、絵本の制作の過程で絵本のストーリーをグループで話し合ったり、全員が協同して絵本を制作することが自ら学ぶ姿勢として大切であると考え。その中では、教員の働きかけは必要最低限とし、学生自身が気づいたり、自分自身が意欲的に取り組めるような課題の提示や働きかけを工夫することが大切であると思われる。

②教育、保育所実習などを含めた実習も視野に入れながらPDCAサイクルを確立すること

保育者養成校の多くが2年次以降の授業においては教育実習や保育実習が授業の間に実施されることが多いと推測される。そのため、本学授業でも、実習前には絵本の読み聞かせを重視した

り、実習後には、実習中の子どものつぶやきを記述してまとめ、その後の授業に生かすなど実習を視野に入れた授業計画や振り返りが効果的であったと思われる。

③授業外での学修（事前準備や授業での振り返り）も視野に入れること

本学の授業でも絵本ノート作りや絵本の制作が実践事例として挙げられた。これらの実践は授業の中だけで済ますことはできず、図書館で資料を集めたり、作業をするなど授業外で活動することが求められる。もともと大学の授業は授業と授業外での活動を視野に入れた授業計画（シラバス）が必要であることから、学生が授業外で活動しやすい工夫や配慮が必要である。

④計画的な授業展開と毎年の授業を省察することで改善を繰り返すこと

シラバス作成においては、昨年度の授業展開を振り返りながら、課題となった点を反省・改善しながらより良い授業展開を絶えず模索することが重要である。特に何年も授業を進めていると授業展開が定型化してしまう懸念がある。他者の授業研究を調査したり、同じ大学内での教員間での情報交換や授業研究などを絶えず行うことで改善を繰り返す必要があろう。

⑤保育者養成校として、他の科目との連携も視野に入れた授業展開を検討すること

本学の授業でも絵本の読み聞かせでは、絵本を選ぶ際など児童文化の授業との連携が必要であったり、絵本の制作においては、カリキュラムマップなどをもとに図画工作や造形などの授業と連携することで、より深みのある実践的な授業展開ができることが推測された。

本研究の今後の課題としては、先行研究と授業全体の流れを分析、考察することに焦点が置かれ、授業の実践における学生自身の学ぶ姿勢や指導方法の考察がとらえきれなかった。さらに、保育内容の領域「言葉」において「どのように学ぶか」といった授業方法のみでなく、「何を学ぶか」という授業において学ぶべき項目を一つ一つ精査する必要があると思われる。今後は、さらに授業における実践事例を一つ一つ積み上げて詳細に考察することで、保育者養成校として実践力を養う授業展開を目指していきたい。

引用・参考文献

- (1) 文部科学省中央教育審議会（2012）新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて—生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ—（答申）
- (2) 文部科学省中央教育審議会（2016）幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）
- (3) 南陽慶子（2017）保育内容「言葉」に関する研究の動向と特質，こども教育宝仙大学紀要 9（1），pp. 13-23
- (4) 原田大樹（2017）「保育内容（言葉）」のアクティブラーニング実践，福岡女学院大学紀要 人間関係学部編（18），pp. 39-45
- (5) 鈴木貴史（2016）保育者の絵本選択における言語表現重視の傾向とその課題—保育者養成課程における絵本ビブリオバトルの実践から—，帝京科学大学紀要 12，pp. 147-153

- (6) 柴田奈美 (1997) 保育内容「言葉」を視座とした絵本の研究, 岡山県立大学短期大学部研究紀要 (4), pp. 25-38
- (7) 平嶋慶子 (2017) 保育内容『言葉』の教材と指導法の研究—15年間の『言葉』指導の実践とそれ以前の指導の検討(1)お話し(絵本・紙芝居)—, 鹿児島女子短期大学紀要 (52), pp. 109-119
- (8) 本田真大 (2017) 幼児への読み聞かせを行う保育内容(言葉)の授業が幼稚園教諭としての資質・能力に与える効果, 北海道教育大学紀要 教育科学編 68(1), pp. 17-25
- (9) 鳥居美佳子, 古屋祥子, 山田千明 (2017) 食育カルタ制作—保育内容複数領域の科目間連携授業の試み—, 山梨県立大学人間福祉学部紀要 12, pp. 68-82
- (10) 原田大樹 (2016) 保育内容「言葉」と小学校国語科との接続—保幼小の学びの連続性を目指して—, 福岡女学院大学紀要 人間関係学部編 (17), pp. 69-74

(受理日 2018年1月10日)